

# 幸福の赤いサクランボ



現在4カ所あるさくらんぼ園地のうち、就農してすぐに田んぼを埋め立てて植栽した通称「第一園地」に、「やまのべ多田耕太郎のさくらんぼ」という看板を掲げたのは2003年の5月だった。

前年の12月、山辺町内で催された講演会で、「旅と、ことば」というタイトルで話されたドイツ文学者・エッセイストの池内紀先生と、私と妻の三人で親しく話をさせていただく機会があった。

私は、池内先生に就農までの経緯や、さくらんぼを作りながら気付いたこと、これから先、もっと園地を拡大して最高レベルのさくらんぼを作ろうと考えていることなどを話した。そして、ゲーテやハイネ、ヘッセなどの詩歌にあるような表現で、農園の看板やチラシにマッチする言葉は何かありませんか、と尋ねてみた。

## 「看板に名前」文学者助言



その時、池内先生は私の顔と、私の名刺を見ながら、「『多田耕太郎』という名前を、看板やチラシに大きく使えばいいと思いますよ」とニコニコしながら話された。「農業を一生懸命に仕事にしていこうという、その人の名前が多田耕太郎。『やまのべ』という地名と組み合わせるのはとても面白いと思いますよ」と、私と妻の顔を見ながら、手ぶりを交えて続けた。

別れ際に「来年、さくらんぼシーズンに、ぜひまた遊びにいらしてください」と声を掛けると、池内先生は「必ず来ますよ。忙しくなる前に看板を見にね」と答え、手を振って帰られた。

2003年に掲げられたテント生地の看板は11年が経過した今月初め、アルミパネルの看板に掛け替えられた山辺町大塚

それから私は、先生が話されたことをどんなふうに見直ししようかと考えた。そして年明けに「やまのべ多田耕太郎のさくらんぼ」という文字列を、一文字1辺四方のテント生地に書き込み、町の中心部を向いた防風ネットに、さくらんぼの花が咲くまで取り付けてくれるように、町内の看板屋さんに発注した。

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、1・7畝のサクランボ園を経営する。